

【研究論文】

## 教育ツールとしてのマンガ

スチュワート ロナルド

### Comics and Manga as an Educational Tool

STEWART Ronald

#### 【要 旨】

現在、マンガを教育のツールとして活用する動きは、急速に広まりつつある。これは最近における急展開と思われがちだが、実は100年以上前からマンガは教育目的で利用されてきた。本稿では、この日本と英語圏、特にアメリカにおけるマンガに関する歴史を振り返ることとし、筆者のオーストラリアでの経験も踏まえて洞察を行う。このような歴史を考察してみると、教育現場でのマンガの活用はメリットがあるにもかかわらず、コミックスを単なる娯楽として捉え、教育的価値がないという偏見が横行し、そのことがマンガの発展を長く抑圧してきたことが判るが、未だにその偏見は僅かながらも社会において残されている。しかし教育ツールとしてのマンガの受容が進み続けることで、こうした偏見は消えてゆくであろうと本稿は結論づけた。

#### 【キーワード】

教育、漫画、マンガ、教材、歴史、授業法、言語習得、反コミックス運動

#### 【ABSTRACT】

The use of comics and manga as a tool in education is becoming quite widespread. There is a tendency to think of this as a recent development, but in fact comics and manga have been used for educational purposes for over a century. This paper looks at this history in Japan and in English-speaking countries, in particular the US but also the author's experiences in Australia. Throughout this history, attempts to use comics or manga in education educators, despite the merits have had long had to content with perceptions of comic being mere entertainment and lacking educational value. The paper concludes that the increasing acceptance of

comics and manga as educational tools will move beyond this.

### 【KEY WORDS】

comics, manga, education, instructional tool, history, Japan, US

#### はじめに

2022年10月、熊本大学は文学部附属国際マンガ学教育研究センターを設立した。過去25年間にコミックスおよびマンガ学が学際的な研究分野として発展するにつれ、国内外でマンガ研究とそれに伴うマンガ研究所が少しずつ増えてきたが、このセンターの名称に「教育」が使用されたことは、別の傾向を示しているように思われる。要するに、マンガが単に研究の対象としてだけでなく、教育のための有効なツールであるという認識が定着しつつある状況を象徴しているのである。特に海外の教育現場では、この20年でその認識の広がりが顕著化し、一般的になりつつある。日本でも、少し遅れながらも、マンガの教育利用は徐々に進んでいる。

近年の例として、海外では、2020年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館開催のシンポジウム「Teaching (Practically Anything) with Comics (コミックスで(ほとんど何でも)教える)」が挙げられる。また2022年10月にスペインのバレンシア大学では、コミックリーディングと持続可能な開発目標(SDGs)をテーマにした「The First International Conference Teaching with Comics (第1回マンガを使用した教育国際研究大会)」が開催された。2023年7月にはケンブリッジ大学教育学部も大規模なコミックス研究大会を計画している。日本では、2017年に早稲田大学教育総合研究所開催の「教育最前線講演会」を基に『学校教育におけるマンガの可能性』という研究書が出版された。付言すると、同年の日本マンガ学会の第16回大会シンポジウムのテーマは「学校とマンガ」であった。その2つのイベントでは大学教育の実例も含まれていた。2022年には豊島区立歴史文化記念館(トキワ荘通り昭和レトロ館)で、その7年前に始まった「これも教育マンガ」という学習マンガ以外のマンガの教育的使用を促す企画の常設展示スペースが設けられた。

このように、教育におけるマンガの利用は近年広く注目され受け入れられるようになってきたが、実は教育目的でのマンガ利用は100年以上の歴史がある。その一方で、教育者、図書館員、文化評論家、さらには保護者から、マンガそのものは単なる娯楽であり、学習意欲をそぎ、場合によって有害でさえあるかもしれないという疑念

## 教育ツールとしてのマンガ

が抱かれ、その疑念との戦いを長い間強いられてきた。現在でも、この疑念は一部の人々の間に残っている。そこで本稿では日本と英語圏（主にアメリカ）における教育目的のマンガ利用の歴史を簡単に振り返ってみたい。

### 1. 戦前のマンガと教育

明治初期から大正時代にかけて日本で近代的なメディア環境が整備されるにつれ、マンガを売り物にした出版物（雑誌や新聞）は、その教育効果を謳うようになった。その先駆は 1877 年に始まった諷刺雑誌『团团珍聞』の第 1 号であるが、そこには、雑誌の記事および（ポンチ絵）マンガなどの中で、日本語にふりがなや英訳が付けられていた。その中で編集者は教育目的について熱く語り、このスタイルは子どもにとって読みやすいだけでなく、これは日本人にとっても外国人にとっても有益であり、全国のあらゆる年齢の日本人学生が英語で会話する方法を学ぶのに役立つと唱えた。

その 30 年後、1907 年に日本で初めてのキャリア漫画家となった北澤楽天が子どもむけ雑誌『フレンド』を創刊した。楽天はこの雑誌で、子どもたちの「漫画趣味」を高めて、健全な笑いを交えて知識を伝えることができると考えた。当時の「漫画」というものは 1 コマ漫画と 2 コマから十数コマまでの短い物語で、ほぼ全てが笑いを狙っていたものであった。1912 年に楽天は『家庭パック』という雑誌を始めたが、その第 5 号（1912 年 9 月 1 日）の序文で、当時三輪田女学校教頭であった教育家三輪田元道が「上品な家庭的な漫画雑誌などは大いに歓迎すべきであらう」と書き、雑誌を誉めちぎった。三輪田は、好奇心に富んでいて観察力のある子どもにとって、絵ほど満足を与えるものはない、絵中心の表現である漫画を通じてユーモアのセンスを身につけたら、西洋人と同じように、人の注目を集めるウィットある演説ができるようになり、その結果、社交上の良い教育になると論じた。

アメリカでは、20 世紀初頭から新聞に掲載されたコミックの付録が大人気となっていた。しかし、子どもたちに人気のある新しいメディアの多くがそうであるように、大人たちはその影響力に疑念を抱くようになる。マンガが子どもたちの道徳や趣味のセンスをダメにしてしまうと懸念する教師たち、宗教指導者、女性団体は、20 世紀の最初の数十年もの間、非難を繰り返した (Tilley & Weiner, 2017 : 360)。しかしこのような批判の嵐にもかかわらず、1920 年代からマンガに教材としての価値を見出す教育関係者がいたのである。現に 1926 年から 1928 年にかけてダラスの新聞に連載されたテキサスの歴史を描いた漫画は、200 ページほどの本にまとめられ、数十年

にわたって同地域の学校の教科書として広く使われた。1928年にシカゴ大学附属高等学校の社会科教員ハワード・ウィルソンは論文で、新聞の漫画やコミックストリップは、学生が社会的・政治的問題を理解するための貴重なツールであり、さらに生徒に漫画を描かせることで、学習したことの理解度を測ることができると主張した。1935年の全米英語教育評議会 (National Council of Teachers of English Newspaper) が発行したカリキュラム文書では、国語(Language Arts)の授業で言語の様々な側面を教えるための教材としてマンガが取り上げられた。また、1930年代から1940年代にかけて、複数の出版社が教育的なマンガの本や雑誌 (現在の学習マンガと似たもの) を作る試みを始めた (Tilley & Weiner, 2017 : 358-59)。

1930年代の日本でも、教育目的のマンガが増えたが、同時にマンガを批判する声も高まった。1935年に北澤楽天の三光漫画スタジオ同人と出版社東雲堂の編集部は2本のマンガ教科書『小學マンガ算術 尋常第一學年児童用 (國定教科書準據)』と『小學マンガ國語讀本 (二卷) 尋常科用 (國定教科書準據)』(図1)を発行し、国語の教科書の序文に教育上のマンガの利点を主張した。これらの教科書は、マンガのユーモアの楽しさによって、知らず知らずのうちに国語が好きになり、ユーモアを通じて真面目な物事への理解が促されると主張した。そして、「マンガそのものは児童教育上非常に有意義である」という文部省による「算術教師用書」(一種の教員むけの教育手引き書)も引用し、その有用性をアピールした。

1930年代に『のらくろ』というマンガの爆発的人気で物語ブームが起こったが、それと同時に子どもへの悪影響についての心配も増幅した。その一つの事例として、児童文学作家であった村岡花子が『朝日新聞』におけるコラム「女性文化」(1937年6月2日)に書いた少年雑誌の付録漫画に対する批判が挙げられる。村岡はマンガに部分的な教育的価値があることを認めつつも、「漫画に乱暴は付きものであり漫画の用語は卑俗語であるべきもののやうに考へてゐる人が今なほあるらしい」と、漫画における言葉の下劣さに対して怒りを示した。

このように子ども漫画が問題視されてきた時期でもある1936年から大手出版社の講談社は『講談社の繪本』という雑誌を刊行し始める(図2)。これは1930年代後半においてマンガの主要な発表の場の一つになった。宮本大人(2007)によると、講談社には元教員が多く漫画の批判に対して敏感であり、「教育的」な漫画を導入しようとしていた。そして講談社は『講談社の繪本』の副題を「子供が良くなる」とし、雑誌の教育的な価値を強調する序文を教育家などに書いてもらい、掲載された漫画の多くが道徳的な教育を狙ったものであることをアピールしたのである。

## 教育ツールとしてのマンガ

中国との戦争が本格化してから、内務省より「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が通達され、政府は「少国民」であった子どもの読物を統制しようとした。統制下では、多くの赤本が禁止された。出版社は、マンガのページ数を減らし、敬虔、忠孝、奉仕、正直、誠実、謙譲、男気、愛情など「日本精神」の確立に寄与する内容や科学的知識と生産知識を促進する内容を採用することで、時間の浪費を避けるように求められた。結果として、自然科学や実用的な知恵が盛り込まれたマンガが増えてユーモアは減り、「リアリズム」のあるマンガが増えたのである。現在の日本の学習マンガの原型となったマンガがこの状況下で生まれたと考えられている（伊藤, 2016）。1939年に『東日小学生新聞』に連載を始めた秋玲二の「勉強マン画」は1940年から単行本シリーズとなり、戦後も続くことになる。

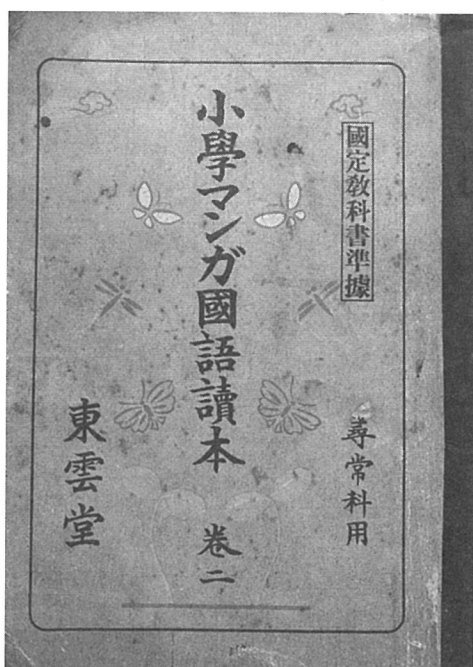


図 1 『小學マンガ國語讀本（二巻）尋常科用（國定教科書準據）』（1935）



図 2 『講談社の絵本：漫画と孝行繪話』（1938年5月15日号）

## 2. 戦後のマンガと教育

戦中と戦争直後のアメリカでは、マンガ雑誌（＝コミック・ブック（Comic book））が隆盛を極め、1948年に毎月約8千万冊から1億冊のコミック・ブックが販売された。1947年からは、教育社会学のハーベイ・ゾーボー教授がニューヨーク大学でマ

ングのワークショップを実施した。これは、漫画家、出版社、教師などを集め、漫画の教育的可能性を探ることを目的としていた。このワークショップは、「コミュニケーションの媒介と社会的勢力としてのマンガを初めて包括的に分析した」と言われている。ワークショップの諮問委員会の中には、有名な社会学者 C.ライト・ミルズや他の著名な教育学者も含まれていた。ワークショップは数年にわたり開催され、教育漫画及び特別目的漫画を実験的に作り始めた団体が参加した。例えば、ゼネラル・エレクトリック社などの企業、名誉毀損防止連盟 (Anti-Defamation League) などの社会団体、米国国務省などの政府機関が参加した。このようなマンガを使った教育・学習に関する研究への組織的アプローチは、その後は繰り返されることはなかった。しかし多くの個人研究者がそれに続き、当初は読書に困難を抱える子どもたちへの支援としてのマンガに焦点を当てた研究が行われた。2000年以降、研究は多様化し、博士号レベルの研究も珍しくなくなった (Tilley & Weiner, 2017 : 363-64)。

1940年代末からホラーおよび犯罪をテーマにしたマンガが増えたが、マンガは広く子どもの読物として認識されていたことから、親が中心となって反コミックス団体の活動が始まった。ドイツ生まれのアメリカ人で、児童発達学専門の精神科医であったフレドリック・ワーサムが1954年に出版した著書『無垢への誘惑』の中で著した有害コミックス論 (マンガを読む少年が不良になる論) はさらに世間を騒がせた。その影響を受けて、1954年4月と6月の間に、コミックを主に議論の対象とした未成年者非行に関する公聴会が連邦議会上院小委員会によって開催された。こうした政治的圧力に対する危機感がマンガの出版社による自主規制団体の組織化を促したが、このことは裏目に出て、マンガ産業を大きく縮小させ、次の約20年間には教育現場でのマンガ活用は抑制され、一時期の熱狂は消え失せたのである。

しかし1970年代から教育現場でのマンガ使用が再び増え始めた。マンガは主に国語 (language arts)、ESL (第二国語としての英語)、そして外国言語のクラスで教育ツールとして使われ始めたのである。マンガはリメディアル読者のモチベーションを高める優れたツールと見られてきたが、とりわけ第二言語を習得する場合、マンガはふさわしい教材であった。文字だけで書かれた小説よりも、物語の中で誰がしゃべっているのかが吹き出しのおかげで学習者にとって分かりやすいからである。そして、マンガは文字と絵の相互作用からできているコミュニケーション媒体であるため、マンガの絵と他の視覚的な面から文脈の手がかりを得ることが可能であることから、学習者が文字による対話などを理解するのに役立つ。しかもマンガは、言語を中心とした教科書のような作為的な会話ではなく、より本物に近い会話 (more authentic

## 教育ツールとしてのマンガ

conversation) を使う傾向がある。アメリカ人の言語学者スティーヴン・クラッシュェンは 1994 年に発表した著書『読書はパワー』(日本語訳 1996 年)の中で、言語習得をするために読書の重要性を論じ、言語教育に大きな影響を及ぼした。これは 1990 年代の後半に小学校から高校まで (K to 12) の教室にマンガを教材として急速に普及させる原動力の一つとなった。

筆者も 90 年代にオーストラリアの大学で日本語専攻の学生として、その後、日本語と ESL 教育の研修講師として、マンガを教材として使用することを直接経験した。大学で日本語を学んだ際、授業中の学習および自習中に『漫画人』(Mangajin, 1988-1997)という質の高い月刊学習誌(図 3)をよく利用した。この雑誌では、様々な日本のマンガの和英対訳、そして語彙と文法の説明を通じて日本語を学ぶことができる。筆者が初めて日本語だけで読んだマンガはこの雑誌に載っていた小林まことの短編漫画『ホワッツマイケル』の一話であった。今もその達成感を覚えている。中学校と高校で日本語の研修講師として教えた実習期間にも、ニューサウスウェールズ州教育省によって 1980 年代末に作られたマンガ小冊子(図 4)を活用した。ひらがなを学んだばかりの生徒向けで、容易な日本語で書かれた数ページだけの短いマンガ物語であった。



図 3 『漫画人』17号  
(1992年5月17日)



図 4 『くろふねのはなし』  
NSW Department of Education (1989)

ティルリーとワイナーは、1990 年代後半から 2000 年代にかけての教室でのマンガの利用は、マンガに関連する学術的、教育的、図書館的な会議や研究大会の増加に

よって支えられていたと指摘する。また教育現場でのマンガの利用は、学校、大学、公共図書館の蔵書数の増加にも支えられている。この時期にマンガの学校と図書館への売り上げは約 30 倍に激増した(2017: 360-61)。言語教育の教材としてマンガが使われたことは、あらゆる教科にマンガ活用が広がる一つの大きなきっかけとなった。

もう一つは、1980年代末のグラフィックノベルのブームであった。大人向けの単行本化されたマンガが注目され、文学賞を受賞した作品もある。歴史、ジェンダー、移民、アイデンティティ、セクシュアリティなど、深刻な社会問題でもマンガが扱えるという意識が高まったのである。現在、大学などでよく使われているグラフィックノベルの中には次のタイトルがある。ユダヤ人のホロコースト史と親子関係を主なテーマとしたスピーゲルマンの『マウス』(1996)、イラン革命と戦争を生き抜いたイラン人少女が両親によって身の安全のためにヨーロッパに送られる物語を描いたサトラピの『ペルセポリス』(2003)、中国系アメリカ人のアイデンティティと人種差別を取り上げたヤンの『アメリカ生まれの中国人』(2006)、著者の青春とレズビアンとしてのセクシュアリティの発見、そして複雑な家族関係を描いたベクダルの『ファン・ホーム ある家族の悲喜劇』(2007)がその事例である。上記のグラフィックノベル(単行本漫画)4冊はいずれも日本語訳が存在する。こうしたマンガ1冊に注目して熟読する文学などの大学科目("one book course")もあれば、科目の中に部分的にマンガを使用する大学の教員も多い。コミュニケーション論、ジェンダー論、英文学、経営学、社会学、美術学、メディア論、看護学、歴史学、修辞学、数学 アジア研究、戦争学、多文化共生学、デザイン学、表象論などあらゆる講義にマンガが使用されることがある。

授業におけるマンガ導入は、学生のやる気を引き出して批判的思考を刺激している他、様々な専門科目におけるわかりやすい入口を提供している。さらにマンガそのものを芸術として研究しようとする教員の数が増加するにつれて、マンガを教育に活用する根拠および授業での活用事例を紹介する書籍も年々増えてきた(図5)。教育のマンガ活用に関するオンライン学術ジャーナルもあるし(*SANE Journal: Sequential Art Narrative in Education*)、教員間でマンガ学やマンガ活用のシラバスを交換し、互いに参考にする活動も見られるようになり(たとえば *Spin Weave and Cut: "Comics Courses Syllabi"*のWebサイト)、大学のマンガ文化の講義、あるいはコースのために教科書として出版された本も増えている(例えば、スズキとスチュワートの『日本のマンガ: 批判的なガイド』(Suzuki & Stewart, 2022)と他の *Bloomsbury Comics Studies*のシリーズ本)。マンガの教育利用は定着しつつあるように見えるが、



## 教育ツールとしてのマンガ

とは言え、マンガを使う教員やマンガの授業をする教員は他の伝統的な教授法を用いている教員たちと異なり、未だにマンガ利用やその教育的価値についてあらためて伝統的教授法にはない長所を証明しなければならない必要がある。

戦後日本におけるマンガの教材化の歴史は、上述したアメリカにおける戦後の活用といくつかの共通点がある。その一つは、戦後すぐのマンガの隆盛（日本では赤本マンガと貸本漫画）の中で、マンガは子どものモラルをダメにしてしまう懸念が反マンガ運動につながったことである。実際に「童心を蝕むもの：赤本漫画の問題」（『アサヒグラフ』6月22日号、1949）に見られるような当時の代表的メディアの記事はマンガの悪影響を主張していた。もう一つの共通点は、日本においても1970年代は教育手段としてのマンガが転換期を迎えたことである。1968年に集英社から発売された『学習漫画 日本の歴史』が人気を博すと、他の出版社も追随し、1970年代から80年代にかけて、小学校や中学校の図書室にも学習漫画が置かれるようになった。ただその多くは歴史や伝記ものであって、それ以外のマンガは、手塚治虫の作品や特に西日本では中沢啓治の『はだしのゲン』などごく一部を除いては、殆ど皆無に等しかった。このように、（近年、小学校の教科書の一部にマンガ表現はある程度使用されるようになって）教室でマンガが使われることがまだ少ないという事実は、マンガを単なる娯楽として捉える古い考え方が残っていることを浮き彫りにしている。そして大学においてもこうした偏見はまだ僅かに窺われる。

マンガ研究者の秦美香子（2018）によると、1970年代の大学教育におけるマンガの活用について、おそらく2つの初の事例があった。第一に1973年に京都精華大学（当時は短大）で一つのマンガクラスができ、第二には1977年に花園大学の入試にストーリーマンガが使用されたことである。秦の言葉をそのまま借りれば、「1970年代にマンガは社会に対する批判的なまなざしを育成できる教材として、あるいは文学に類するものとして、高等教育に取り込まれ始めたことが推測できる」（秦2018:4）。このようにマンガが教材としての価値を持つようになった背景には、1960年代後半から70年代前半にかけて、大人向けのマンガや文学性の高い少女マンガが社会的に台頭してきたことがあるであろう。現在、20以上の大学や短大がマンガのコースを提供しているが、大半は実技としてのマンガである。これは現在の英語圏の大学よりも多いが、その反面、教育ツールとしてのマンガ活用を行う一般的な講義などに関しては、日本の大学は英語圏より僅少である。それと関連して、授業・講義でのマンガの活用事例を紹介する本もまだ日本の場合には比較的少ないというのが実態で（例を挙げると、宮原浩二郎と荻野昌弘『マンガの社会学』（2001）；早稲田大学教育総合研究

所の『学校教育におけるマンガの可能性を探る』(2018) ; 山田奨治編『マンガ・アニメで論文・レポートを書く:「好き」を学問にする方法』(2017))、日本においては教育ツールとしてのマンガ研究の発展が一層望まれるのである。



図 5 教育のツールとしてマンガ活用を紹介しその価値を論じる  
英語と日本語の本と雑誌の一部 (文献リストにも参照)

## おわりに

マンガ学を教える教員や他の講義あるいはゼミでマンガを使う教員と話すとき、多くの教員にとっての悩みのひとつは、そのような講義のために必要なマンガ蔵書に関して大学図書館が理解を持たないことが少なくなく、蔵書の確保の難しいことである。多くの大学附属図書館ではマンガの収集に根強い抵抗が未だにあり、こうした壁を超えるには、どのようにすればよいのかわからないところもある。筆者が所属している大学でも、図書館でマンガ購入できるようになったのはわずか 8 年ほど前からである。だがそうは言っても、他の書籍と異なり (マンガの教育的価値が疑われるため)、購入理由を記した特別な書類を提出する必要がある。現在は、複数回の購入で 1 つの理由書になるように条件が緩和されているが。

こうした動きは、マンガで卒業論文を書きたいという学生が増えていることもあってか、マンガの教育的価値が少しずつ、しかし確実に保守的な教育施設に認められつ

### 教育ツールとしてのマンガ

つある証であると考えたい。この傾向は冒頭で紹介した国立大学のマンガ研究教育センターの設立にも表れている。また 1999 年の文部科学省の「子ども科学技術白書」はマンガで書かれた最初の白書であったが、それに始まり、最近では防衛省、外務省、厚生労働省などが次々とマンガによる白書等を出版し、いわば政府機関も公教育においてマンガ活用していることにもこの傾向は見られる。

マンガ・漫画の教育的活用は長い歴史があるにもかかわらず、まだ教育界の中に完全な市民権を得ていない。しかし、近年に見るマンガの教育的活用の急成長と浸透ぶりを考えると、マンガが単なる娯楽として疑われることは次第になくなり、教員が小説や映画、歴史書のように普通の教育ツールとしてマンガを活用し、図書館の購入希望でも特別な理由書を書く必要がなくなる日はそう遠くないと筆者は考えている。

### 参考文献

- Aman, R. and Wallner, L. eds. *Teaching with Comics: Empirical, Analytical, and Professional Experiences*. Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2022.
- Boerman-Cornell, W., Kim, J. and Manderino, M.L. *Graphic Novels in High School and Middle School Classrooms*. Maryland: Rowman & Littlefield, 2017.
- Blanch, C.L. *Searching for the Comic Book Scholar: an Autoethnographic Study of Educators' Experiences with Comic Books*. PhD dissertation Ball State University, 2017
- Brozo, W.G., Moorman G., and Meyer, C.K. *Wham! Teaching Graphic Novels Across the Curriculum*. New York: Teacher College Press, Columbia University, 2014.
- Burger, A. *Teaching Graphic Novels in the English Classroom: Pedagogical Possibilities of Multimodal Literacy Engagement*. Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2018.
- Cary, S. *Going Graphic: Comics at Work in the Multilingual Classroom*. Portsmouth, NH: Heinemann, 2003.
- DeHart, J.D. *Exploring Comics and Graphic Novels in the Classroom*. Hereshey, PA: IGI Global, 2023.
- Dong, L. ed. *Teaching Comics and Graphic Novels: Essays on Theory, Strategy and Practice*. Jefferson, NC: McFarland & Co., 2012.

- Gavigan K.W. and Tomasevich, M. *Connecting Comics to the Curriculum: Strategies for Grades 6-12*. Santa Barbara, CA: Libraries Unlimited. 2011.
- Frey, N. & Fisher, D. eds. *Teaching Visual Literacy: Using Comic Books, Graphic Novels, Anime, Cartoons, and more to Develop Comprehension and Thinking Skills*. Thousand Oaks, CA: Corwin Press, 2008
- Hill, C. ed. *Teaching Comics Through Multiple Lenses: Critical Perspectives*. London: Routledge, 2017
- Hutchinson, K.H. "An Experiment in the Use of Comics as Instructional Material." *The Journal of Educational Sociology* 23(4), 1949. pp.236-245
- Jaffe, M. and Hurwich, T. *Worth a Thousand Words: Using Graphic Novels to Teach Visual and Verbal Literacy* *Graphic Texts for Learning: Guide to Middle Level Educators*. Gainesville FL: Maupin House Press, 2010.
- Jaffe, M. and Monnin, K. *Using Content-Area Graphic Texts for Learning: Guide to Middle Level Educators*. Gainesville FL: Maupin House Press, 2010.
- Jones, R.B. *(Re)Thinking Orientalism: Using Graphic Novels to Teach Critical Visual Literacy*. New York: Peter Lang, 2015.
- Kirtley, S.E., Garcia, A. and Carlson, P.E. eds. *With Great Power Comes Great Pedagogy: Teaching, Learning and Comics*. Jackson: University Press of Mississippi, 2020.
- Monnin, K. *Teaching Graphic Novels*. Gainesville FL: Maupin House Press, 2010.
- Monnin, K. *Teaching Early Reader Comics and Graphic Novels*. Gainesville FL: Maupin House Press, 2011.
- Reynolds, E.M. *Comics: A Teaching Aid for Slow Learners*. MSc dissertation, New Jersey State Teachers College, 1951.
- SANE Journal: Sequential Art Narrative in Education*  
<https://digitalcommons.unl.edu/sane/about.html>
- Smyth, T. *Teaching with Comics and Graphic Novels*. New York: Routledge, 2009.
- Sones, W.W.D. "The Comics and Instructional Method." *Journal of Educational Psychology* 18(4), 1944. pp.232-240
- Spin Weave and Cut: " Comics Courses Syllabi"*  
<https://spinweaveandcut.com/comics-courses-syllabi/>
- Suzuki, S (C.J.) & Stewart, R. *Manga: a Critical Guide*. London: Bloomsbury

## 教育ツールとしてのマンガ

Academic, 2022.

Tabachnick, S.E. ed. *Teaching the Graphic Novel*. New York: MLA, 2009

Tilley, C.L. and Weiner, R.G. "Teaching and Learning with Comics." Bramlett, F., Cook, R.T. and Meskin, A. eds. *The Routledge Companion to Comics*. New York: Routledge. 2017. pp. 358-366

『アサヒグラフ』「童心を蝕むもの：赤本漫画の問題」6月22日号、1949. pp.4-5

『朝日新聞』「子供雑誌の浄化へ」10月29日号、1938.

池上賢「日本語教育で活用される日本のマンガ」『マンガを知る：歴史と現状：日本語教師読本 7 eBook』2022.

石毛弓と小林宣之編『なぜ学校でマンガを教えるのか？』（大手前大学比較文化研究叢書15）水声社、2019.

伊藤遊「学習マンガ：戦前から生まれた〈教育〉ツール」、竹内オサムと西原麻里編『マンガ文化55のキーワード』ミネルヴァ書房、2016. pp56-59

佐渡島庸平その他『学べるマンガ100冊』文藝春秋、2016.

三光漫画スタジオ同人と東雲堂編集部『小學マンガ國語讀本（二卷）尋常科用（國定教科書準據）』東雲堂、1935

清水勲(監修)『漫画雑誌博物館1：「団団珍聞」1自由民権期』国書刊行会、1986.

秦美香子「大学教育におけるマンガの可能性：マンガ研究の視座から」早稲田大学教育総合研究所(監修)『学校教育におけるマンガの可能性を探る(早稲田教育ブックレット)』学文社、2018. pp.3-13

宮原浩二郎「知識触媒としてのマンガ」宮原浩二郎と荻野昌弘『マンガの社会学』世界思想社、2001. pp4-31

宮本大人『『講談社の絵本』における「子供が良くなる」漫画の洗練過程』『マンガ研究』第10号、2007. pp.55-60

早稲田大学教育総合研究所監督『学校教育におけるマンガの可能性を探る』（早稲田教育ブックレット）学文社、2018.

山田奨治編『マンガ・アニメで論文・レポートを書く：「好き」を学問にする方法』ミネルヴァ書房、2017.

吉田佐治子「教材としてのマンガ」『摂南大学教育学研究』第9号、2013. pp25-34